2026 年度 NUSOM サマープログラム体験記

名古屋大学医学部医学科 5 年　宇田悠莉

このたび私は、2026 年 7 月 7 日から 13 日までの 1 週間、ジョンズホプキンス大学、デューク大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、カリフォルニア大学デービス校、ランカスター大学、そして名古屋大学の医学部学生とともにサマープログラムに参加しました。本プログラムでは、講義や施設見学、グループディスカッションを通じて日本の医療制度や地域医療、在宅医療、高齢者医療について学びました。また、海外の学生との文化交流や共同作業を通じて、医療だけでなく異文化理解を深める貴重な機会となりました。

最も印象に残ったのは、かがやきクリニックで学んだ在宅医療です。車椅子利用者と地域住民が一緒にモーニングへ出かけたり、街歩きを楽しんだりする活動について伺い、在宅医療は病気の治療だけでなく、住み慣れた地域でその人らしい生活を続けられるよう支える医療であることを学びました。
また、訪問診療を受けた患者さんについて、生物学的・心理的・社会的要因を整理し、患者さんの目標に沿った支援を考えるグループワークを行いました。私たちのグループは、アルコール性肝障害を持つ患者さんを担当し、身体的問題だけでなく、外出が困難な住環境や家族背景、精神面などを整理しました。その上で、患者さんがどのような生活を望んでいるのかを考え、目標達成に向けた支援について議論しました。この活動を通して、疾患だけではなく生活全体を捉え、患者さんを支えることの重要性を学びました。

老年内科の研究室では、高齢者医療における多疾患併存（multimorbidity）や多剤併用（polypharmacy）について学びました。高齢患者にガイドラインどおりの治療を行うと薬剤数が増えやすいため、一人ひとりの生活や状態に応じて、本当に必要な治療を見極めることが重要であることを知りました。さらに、国立長寿医療研究センターでは、ウェアラブルロボットやゲーム感覚で取り組めるリハビリテーション、咀嚼能力を評価するガムなどを体験し、高齢者が楽しみながら健康を維持できる工夫を学びました。岐阜で訪問した、Cam Cam Swallow という嚥下障害のある方向けの食事を提供する施設では、嚥下機能が低下した方でも食事を楽しめるよう、見た目や味にも配慮した食事が提供されており、食べることを通して生活の質を支える取り組みに感銘を受けました。

また、本プログラムでは、 海外の学生たちとの多くの交流の機会に恵まれました。病院見学では、それぞれの国の医療制度や病院のシステムについて意見交換を行い、日本の医療の特徴を改めて考えるきっかけとなりました。医療に関すること以外でも、全員で浴衣を着て美濃の町並みを散策したり、鵜飼を鑑賞したりしました。また週末には犬山の城下町を散策するなど授業外でも多くの時間を一緒に過ごし、かけがえのない思い出となりま

した。

　今回のプログラムは、日本の地域医療や高齢者医療について理解を深めるとともに、海外の医学生との議論を通して、自国の医療を客観的に見つめ直す貴重な機会となりました。また、文化や言語が異なっても、患者さんに寄り添いたいという思いは共通していることを実感しました。この経験で得た学びや出会いを、今後の臨床実習や医師としての成長に生かしていきたいと思います。
最後になりましたが、このプログラムに参加するにあたってご支援いただいた、国際連携室の方々、かがやきクリニックの市橋先生、平田さんをはじめとするスタッフの方々、講義をしてくださった先生方に心より感謝申し上げます。





